7月1日発行号から10月15日発行号まで、過去の紙面から8号分の一面を抜粋、読者の皆様と共に小紙の最終回は1973年10月15日発行の創刊号です。50年を振り返ります。

昭和48年／1973年
創刊号 10月15日発行（月刊）

防衛ホーム

発行所　株式会社　桜　企　画
東京都港区西新橋１―20―13
電　話　591―0288・0289
（〒105）毎月15日発行　一部35円

陽ざしを浴びて

すくすくと育つ
赤ちゃんを抱いて
宮司は明るくさいわい
そこにとそ　そこにとそ
平和と自由を守る
自衛官の誇りがある

自衛官と家庭

草柳大蔵

筆者・草柳大蔵氏

隨想二題

ことしの六月、北海道の自衛隊これまで見学した各地の駐屯地、基地や駐屯地を見学に行った。いま熊本師団長になっておられる田中陸将が、雑誌「修親」の関係で同行して下さったおかげで、どこでも大へん便宜を計っていただいた。

北海道びがそうではないが、基地は、どこも明るくて、自衛官は、みんないきいきしていた。旧軍とは違った雰囲気があり、戦時中の「軍」を知っているわたしには、いささか過保護ではないか、と思われるくらい、若い自衛官は大事にされていた。

北海道で座談会を開いたとき、わたしはこういう意味のことを言った。

マスコミでは、いま自衛官が絶っ子扱いされている気味があるが、決して心配することはない。自衛隊がいい仕事をしたら、というのはニュースにはならないが、「明朝で事故が起ったりすると、大々的に書かれる。それは、マスコミ一般の風潮なのだから、気にしないほうがいい、と。

長沼裁判があってから、自衛隊は意地悪、と感じ子どもられているがあれはわずか三人か四人の裁判官が下した判決で、国民の総意ではない。しかし、それを総意だと言わないと、野党が政府を攻撃するの理解がなおさら必要になってくる。

男の仕事に、女の口出しをさせない、という考えの人もいるようだが、自衛官の場合、家族が自衛官の職務を、その眼で見ることが大切だと思う。

いろんな駐屯地で、家族の宿内見学をやっているところも多いが、もっとさかんになってほしい。東京をはじめ、大都市の中、あるいは周辺にある駐屯地、基地などでは、いっそうそれが必要だろう。

わたしの知っている限り、家族が自分の職務を理解してくれない、という自衛官の声を聞いたことはないが、あるいは、そういう人たちもいるか、と思う。

そういう場合、当人の努力も必要だが、やはり家族の理解と協力も大きく物を言う。これから、次第にそれが大切になってくると思いない。

自衛隊は、現在も今後も日本にとっては絶対に必要であり、一部の声に左右されることなく、自衛官もその家族も、誇りと信念を失わないでほしい。

（作家）

筆者・村上元三氏

材料にはならない。

自衛隊の戦力が、攻撃のためのものであり、いまに国民に向って銃口を向けるぞ、と言ったり話したりしている人もいる。おそらくそういう人々は、日本に武力革命がくる、と信じているか、あるいはそう叫ばないと、困る立場にいる人たちだろう。

日本のどこに、武力革命が起る原因があるというのか。自衛隊が武力クーデターを起す、と心配している人たちは、日本人でありながら、本当に日本という国を知っているのだろうか。

共産国は、どこも軍隊を持っている。ついこの間、ソ連を見ても、はっきりわかる。そういう国が、徴兵制度を布いている。と今の日本で軍国主義反対などと言っている者は、知っていないらしい。

それなのに、日本が防衛力を持っていけない、という理由はどこにもない。

自衛官は、だれでも防衛の使命感を抱いていると思うが、若い人は、外部の厳言に迎いされて、悩みを持つようになるかも知れない。そういうとき、まわりの家人

中国の言葉に「絶三言あり、会の特徴だからです。しかし、親は職場に出かけたことを子どもに話してあげることはできます。あるいは、子どもを職場に連れてゆくこともできます。仕事についてのその親の専門知識が、子どもにとってもとんなに魅力的なものか、

に進学すると、それだけで安心してしまい、子どもを学校にまかせてしまう傾向がある。そしてあるとき、大学生になった子どもがマンガを読んでいるのを見て愕然とするのであります。しかし、これはやはりよくないのです。

聴く声、書を読む声、赤ん坊の声」というのがあります。私は、この言葉が好きです。親と子の断絶などといいますが、人間なんてそんなに簡単に断絶するものではありません。そういうことがいわるのは、親と子の間のパイプがいま、それを再録すべきではない時代しかかっているからではないだろうか。

「聴く声」を今日の家庭でさかせることはできないでしょう。ほとんどの父親が「動く」に出ているからです。職住分離が工業化社会の特徴だからです。しかし、親代の父親は、子どもが高校や大学

「夢を語り酒」、これはできませんが、一時、「母子文庫」というのがはやりましたが、私は「父子文庫」の方が有効だと思います。親子の

今日の教育状況は「大学生がマンガを読んでいるから問題」なのではなく「マンガを読むような

化状況の方が問題なのでありまが、こうなると「無法無護」の「革新勢力」はどうするのだろう。第二の道は「国の自衛

が出たが、憲法には「国の自衛権」はうたわれている。となると、道は三つしかなくなる。第一は憲法を改正して「自衛」という言葉まで削り取ってしまうことだ。

それは一種の頭脳ゲームでもあるからです。

ヤングたちが読むコレイボイ」という雑誌の十月二日号に「憲法廃止？　のわが自衛隊はどれだけ強いのか？」という特集がのっている。女の子のハダカ写真をのせて、いる雑誌ですが、この

特集はなかなかしっかりしていておもしろい。資料も明快だし、取材態度にも好感がもてる、ということは、ヤングたちは女の子のハダカ写真を眺めるが、こういうシーリアスな記事も読むということです。

第三の「赤ん坊の声」、これがじつは問題なのです。マードックという学者が書いています。

「今日の夫婦のセックスはアウト・セックス（家庭以外の場所でのセックス）が多くなり、出産は病院ですませ、育児は託児所にまかせ、学生になれば学校の寄宿舎に入れてしまう。となると、いったい、子どもにとって「家庭」とはなんだろう？ということになる！」まさにマードックの指摘のとおり、現代はうっかりすると、「家庭」が「入間形成」の場ではなくなりつつあるのです。

「家庭」が「寝るところ」に変ったところ」だけの場所となったら、親が「家庭」を守る気がするでしょう。「家庭」の変質は現代社会の弱体化であり、国家崩壊の大幅につながってゆく、つまり、もはや「守るに値しない国」が出来るわけです。そうなったら、ファントムが何機あろうと、対ゲリラ・ミサイルが何基あろうと、まったく意味をなさないのです。

スイスで、高田馬場生からどんな言葉をききましたか。彼は、二年間の兵役から帰ってきたばかりなのです。

「兵営の中で、みんなと語りあった一点が胸に残っています。いったい、おれたちは、この美しい国を守るために訓練をうけているのだろうか、それとも外国の強い手で連れてきた「盗名損益」（ナンバーズ・アカウント）を守ってやるために身体を張っているのだろうか？」

さて、日本ではいったい？……そういう議論もあってしかるべきでしょうね。

（評論家）

防衛ホーム配布について

本紙「防衛ホーム」は防衛庁・各幕の協力により全国の陸海空駐とん地・基地・サイトを通してそれぞれの家庭に配布されることになりました。したがって本紙を受領後、各隊においては適宜置されることを指示します。

1973年はこんな年だった！？

【おもなできごと】
４月　振替休日制の導入
４月～第１次競馬ブーム　ハイセイコーフィーバー
７月　ドバイ日航機ハイジャック事件
８月　金大中事件
10月　第４次中東戦争
10月～第１次オイルショックによる物価急上昇
　　トイレット・ペーパー、洗剤などの買いだめ騒動
11月　東洋一の吊り橋、関門橋（下関―門司）が開通
12月　江崎玲於奈氏、ノーベル物理学賞受賞

【流行語】
・うちのカミさんがね（刑事コロンボ）
・省エネ（街のネオンは消え、テレビの放送時間も短縮）
・せまい日本、そんなにいそいでどこへ行く
　（全国交通安全運動標語）
・「ちょっとだけよ」「あんたも好きネ」（加藤茶）
・これにて一件落着（遠山の金さん捕物帳）

【ヒットソング】
・女のみち／宮史郎とぴんからトリオ
・学生街の喫茶店／ガロ
・喝采／ちあきなおみ
・危険なふたり／沢田研二
・神田川／かぐや姫